

氏名	水木 壘
学位の種類	博士 (美術)
学位記番号	第84号
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
論文題目	「/ (スラッシュ)」の美学 DJ、スケートボーディング、写真のレイアウトについて
審査委員	主査 教授 砥綿 正之 教授 井上 明彦 教授 石原 友明 教授 加須屋 明子 中村 史子 (愛知県立美術館学芸員)

論文の要旨

「/ (スラッシュ 英: slash)」は、スラント (slant)、ソリダス (solidus)、あるいは斜線 (しやせん) と呼ばれる約物の一つである。我々が普段目にするところでは、左項と右項を分ける、もしくは接続詞的用法として「または」「いずれか」「AやB」のように並列する、記号的用法として何かに重ねて書き「取り消し」を表す。他にも分数で、縦のスペースを節約したい時や、分数形式だと式が読みづらくなる時など「1/3」「a/b」のように書くなど使用法は様々であるが、それは前後の文意から読み取る他ないものである。筆者が本論で述べていく「/ (スラッシュ)」とは、上記のような意味合いではなく「分け隔てられている状態または繋ぎ合わされた状態において、身体性を起因とした“ある質”を伴った境界面」を指した独自の制作概念といえる。

“/”が「/ (スラッシュ)」になる、つまり記号的世界の概念が物理的世界、制作の現場へどのように飛躍して現れるかを述べよう。まず第一に「/ (スラッシュ)」は、二項以上の異質な物同士を結合する、もしくは分裂させる、その際に面として発現する。たとえば、水と油は、混合し時間が経つと二層に分離する。この時、水と油によって形成された「どちらにも属さない間」ができ、その領域を視覚的には「水、境界面、油」と認識することで「間」という概念が眼を通して物性と結び付き現れる。筆者はここで次のように仮説を立てた。『肉眼では一枚の希薄な面に見えるが、もし面であるなら、異質なもの同士の表面に挟まれ形成されたこれは表裏が存在するはずである』と。事実、この境界面を良く観察すると表と裏で微妙な質の差が発生していることに気が付いた。ここで更に思考の飛躍をして、このような“質”、つまり質感 (英: texture) は物体に宿るものであるからして、それに“差が発生する”ということは、この境界面は可塑的な物であるという考えに至った。以上より、筆者は、記号的世界の“/”を物質的世界の枠組みで捉えなおす際、「/ (スラッシュ)」は「“ある質”を伴った面」を介して実空間に現れると定義付けた。

もう一つ「/ (スラッシュ)」には特徴がある。それは異質なもの同士を関連付ける際、居心地の悪さ、抵抗感、嫌悪感などある種の「障り」の感覚が内在することである。この感覚が強く働けば働く程、「/ (スラッシュ)」によって起こる世界の変化は劇的なものとなる。二つ以上の対象をバラバラにし、再構造化することで全く別の対象として姿を現わす、これが「/ (スラッシュ)」の基本的なプロセスを経た筆者が期待する結果であるため、当然混じり合う物同士を「/ (スラッシュ)」を通して結びつけても、予定調和なものしかできず何の変哲もない退屈なものになってしまう。筆者が本論で標的にするものは、たとえば、短く刈り込まれた髭の固くジョリジョリした感触と唇の柔らかい感触、路上をスケートディングする時の足裏から伝わる真新しいアスファルトの硬質であるが粘りのある感触、レコードをスクラッチする際、指の腹に伝わる溝のザラつきとなめらかなビニールの感触など、物の表面で感覚される二種類の触覚性が併存しているものである。この時、概念的記号的な“/”が形而下のものとなり、二項を関係付けるものとして、レコードの溝やスケートボードといった面の形態を採るのだ—「形而上/形而下」の構図における/記号は、まさに面である—。以上、大きく分けて、「/ (スラッシュ)」は、この二つの条件を満たすことで「身体性を起因とした、ある質を伴った境界面」として物理的世界に現れる—このように記号的世界の概念を物質的世界の概念として読み替える必要性は、筆者が実際に物に触れながら美術制作を行う者であるためといえよう—。

本論の構成は以下である。まず、第一章は、DJの役割や演奏形式について述べ、主に彼らが二枚のレコードによって音楽を作り上げる所作に注目し、「/ (スラッシュ)」の現れについて述べる。第二章は、主に都市の中でスケートボーディングをすることで得られる触覚的なものに注目をする。つづく第三章は写真の展示空間における「/ (スラッシュ)」である。とりわけヴォルフガング・ティルマンズのインスタレーションを「/ (スラッシュ)」の観点から読み解くことで、作家本人によって決められた内容以外を読み込む観者の在り方へと結びつける。第四章では、自作における「/ (スラッシュ)」について触れ、分け隔てながら関連付けるという「/ (スラッシュ)」の言語的に矛盾したものが、ある質を伴うことでどのように作品の中に反映されているかを分析し、それらのまとめである終章へと向かう。終章では、各章をまとめることで、「/ (スラッシュ)」が個人にもたらす効果について述べ、それが芸術的価値の新たな地平を切り開く可能性について言及する。

審査結果の要旨

水木壘の「／（スラッシュ）の美学」は、副題の「DJ、スケートボーディング、写真のレイアウトについて」が示すように、クラブでのDJやスケートボードという水木自身に取り組むサブカルチャ的な経験と、写真を軸とした芸術活動をつなぐものを、「／（スラッシュ）」という同時の記号的存在に見だし、それを創作上の新たな概念として、また既存の芸術・文化への批評的視座として提出しようとするものである。

水木は記述記号（約物）のひとつである斜線punctuation mark「／（スラッシュ）」を「分け隔てられている状態または繋ぎ合わされた状態において、身体性を起因とした質をともなった境界面」と定義し、水と油の境界面のように、異質なもののどうしに挟まれた表裏を持つ物質的な面と捉える。その面の特徴は、異なる2種類の触覚性が並存していること、またその並存には「障りの感覚」すなわち抵抗感や嫌悪感が伴うことである。

本論文の第1章では、DJが曲と曲をつなぐDJミックスにおいて、レコードにふれる身体的行為を通して、二つの曲を相互の異質さを保ったまま繋ぎ合わせることで、この「／（スラッシュ）」の美学を実践していると説く。彼らは積極的な反応を示す観客の中で、レコードに針を落とすことで、リスナーとミュージシャン、受動と能動を関係を絶え間なく組み替え、楽曲の完結性をゆさぶり、新たな音楽体験を創出する。

第2章では、スケートボードが都市の新しい空間体験を生み出すことを説く建築史家イアン・ボーデンの著書『スケートボーディング、空間、都市—身体と建築』や、レヴィ＝ストロースが『野生の思考』で説くブリコラージュの概念によりつつ、スケートボードが身体と地面を分け隔てつつ新しくつなぐことで、区画整理された都市の既存のテクスチュアの関係性を組み換え、水平と垂直の関係の流動化や新しい立体的な景観・空間体験を生み出すことを説く。

これら2章はいずれも水木自身の当事者性にもとづいた具体的な記述となっており、自分が立脚するサブカルチャーの側から芸術創作に有効な概念を抽出するユニークな試みとなっている。通常、DJやスケートボーダーは、音楽家や都市計画者・建築家などが生み出す所産を二次的に利用する点で寄生的な存在として低く見られがちだが、水木は「／（スラッシュ）」という視点からそれらに新たな体験の場の創出を見だし、従来の作り手／受け手のヒエラルキーを否定しようと目論む。それが有効かどうかは、その後続く作品展示や自作の分析において検証される。

第3章では、ドイツの写真作家ヴォルフガング・ティルマンズの写真の展示レイアウトにおいて、異質なテーマやサイズの写真と写真のあいだ、またむき出しの写真の表面と展示壁面の表面のあいだに、この「／（スラッシュ）」の美学を見いだす。その効果は、観者と写真と壁面・空間の制度的な関係をときほぐし、観者自身がさまざまなイメージと表面の連鎖を能動的に編集することを促すという。その関係性は、DJやスケートボーダーが、既存の楽曲や都市の表面に対して持つ関係と相同である。

第4章では、「／（スラッシュ）」という視点から改めて自身の作品展開を反省的に捉え直す。水木は漆芸技法を使ったサイトスペシフィックなインスタレーション「Liquid space」（2005）を起点に研究を進めてきた。そこで試みられていたのは、身体性を伴った表面の質を介

して、そこに映り込んだ場所がイメージとして観客の身体と関係を結ぶことであり、そこから水木は必然的に写真を使った作品へと展開してゆくことになる。そのことからわかるのは、水木にとって「身体、場所、イメージ」の関係こそが分つことのできない重要な要素であり、それを運ぶメディアとしての「表面」は写真でも漆でも違いは無いということになる。

続く「Instability(silver shadow)」(2013)シリーズではレジデンスで訪れたケルンでみつけた50年前に撮られた写真をもとにその場所を再撮影し、それら2枚をデジタル合成することで二つの時を繋ぐとともに、ガラス表面に反射率の高いフィルムを貼ることで「映り込み」を作り出し、それによって展示場所にいる観客がイメージとして関係付けられる。

その後の「New reflection -texture of image-」(2014~)シリーズでは、作者が選んだ場所に、プロジェクターでモノクロ写真を投影し、その風景を再撮影している。その際水木が重視しているのは、プロジェクションする場所の質感(テクスチュア)である。再撮影することでそのざらざらした質や空間がイメージ化され観客へ届けられる。つまり通常の作品では、対象→写真となるが、この作品では、対象→場所→写真というかたちでイメージ化されており、場所とその投影表面の質が対象に加えられている訳である。(ここでは特定の場所がその表面の質感へと変換されているといえよう。)

今回展示された新作「Flight in the cage」シリーズはその延長線上にある作品で、京都に一カ所しか無い公営スケートパークの「プール」がその投影場所選ばれている。「プール」とはスケートボードのための曲面で構成された凹んだ場所で、その曲面に鳥かごの中の鳥のモノクロ写真が投影されることで歪んだ映像となっている。そしてそれを再撮影してできた写真プリントを薄いアルミに貼付けて、工業用ローラーで曲面に加工する、というのが今回の作品の制作プロセスである。今回の作品である。曲面に投影され歪んだイメージが再度別の曲面に加工されることで、2重に歪まされて観客の身体感覚に働きかけてくる。写真がマウントされた薄いアルミ板はあくまで物質性を最小限に押さえることを目的にしており、マットな写真表面との組み合わせで、観る場所によってほとんど歪んだ平面のイメージとしてみえるような感覚も観客に与えて、その目的を果たしている。またそれが結果として水木が意図しているよう「プール」の表面のざらざらや傷、つなぎ目といった投影面の質感を浮かびあがらせることにも結びついている。モノクロで投影された場所をカラーで撮影するという技法も現実とイメージの間に、水木のいう二つのものが結ばれる際にあらわれる「障り」の感覚が繊細に表現されている。

終章では、各章をまとめることで、「/ (スラッシュ)」が個人にもたらす効果について述べ、それが芸術的価値の新たな地平を切り開く可能性について言及する。

本論は実際の経験に基づいて詳細に論じられる第1章第2章と、写真や自作について論じる第3章第4章の間に論調の異なりが見られ、比喩的にせよ「/ (スラッシュ)」で異なるものを繋いでゆくためには、第3章の写真のレイアウト分析の弱さが惜しまれ、第4章での自作分析にも緻密さの欠ける印象が否めないなど、論文構成におけるアンバランスさも気になる。ただし、自身の経験のなかから新たな創作上の概念を抽出し、それを他者の作品分析や自作の捉え直しへと展開する点に、本論の独自性が認められる。

水木の作品は、空間/平面、物質/イメージ、作者/観者といった対立を繊細な感覚で慎重にバランスするものであり、そこに現れる両義性は一見スタイリッシュに見える水木作品の、実は

もっともラディカルな側面と言えるだろう。つまり、水木の試みている、いわゆる「作者」を後退させることで対象と表面の質＝物質感が、鑑賞者の身体に語りかけてくるような方法は、論文で水木のいう、「能動的な観客」としての態度であり、そのように様々な手を尽くして「作者」を後退させることで、場所、そして観客を前景化させることが可能になるのである。論文中ではストリートカルチャーに対する政治的あるいは社会学的な視点は意識的に避けられていたが、展示作品では、それらストリートカルチャーの公共社会内での位置付けについて考察を促すものとなっている。つまり論文を発展的に広げたものが作品であると言えよう。純粹に感覚的な事柄のみならず、政治、社会に関する鋭い指摘も今後、制作活動に組み込まれる可能性が高く、さらなる作家活動の展開にも期待を持つことができる。

以上、上記のように水木の研究制作の方向と展開には一貫性があり、独自の制作研究として十分な成果をあげており、博士の学位に値するものとして、全員一致で合格と認める。